

# 足立区生物園におけるチョウ飼育ボランティアの取り組み

(株) 自然教育研究センター 岩波桂・遠藤耕一郎

## はじめに

足立区では、「協働で築く力強い足立区の実現」が基本理念として掲げられています。生物園においてもその一環としてボランティア活動の推進が求められてきました。このような背景の中、「飼育作業を手伝いたい」という来園者の声と「人手が欲しい」という生物園の要望が一致したことをきっかけに、平成 21 年度よりチョウ飼育ボランティアの導入が決定しました(図1)。



図 1. ボランティア成立の背景

## ボランティア運営の仕組み作り

ボランティアは、希望者と生物園、両者のニーズを同時に満たし、対等な関係の中で成立します。しかし生物園としては、誰でも受け入れられるわけではなく、園の活動を理解できる人でなければなりません。一方、ボランティア希望者にとっても、活動が生活の負担になる可能性や、作業内容に不安を持つことが予想されました。

そのため、生物園からの条件を満たし、かつ希望者が参加しやすいよう仕組み作りを行いました。その代表的なものを以下に紹介します。

### ○募集年齢

生物園の活動の目的を理解し、チョウの命を扱う作業に対し責任を持って取り組める人材である必要があります。そのため、応募資格に高校生以上という条件を設けました。

### ○ボランティア保険加入

作業中に起こる事故やケガの発生する可能性を理解して参加することを前提とし、万が一に備え、ボランティア保険への加入を必須としました。

### ○コマ単位での参加

対象を高校生以上としているため、様々な生活スタイルの希望者が参加することが考えられました。そこで 1 日を 1.5 時間単位の4コマに割ることで、それぞれの生活スタイルに合わせた参加を可能としました(表1)。

表 1. 参加シフト例

	①9:00～ 10:30	②10:30～ 12:00	③13:00～ 14:30	④14:30～ 16:00
11月1日	Aさん	Aさん Bさん	Bさん	
11月2日		Cさん	Dさん	Dさん

### ○飼育作業のレベル分け

経験のない参加者でも技術を身につけながら活動に参加できるよう、作業の内容によりレベル分けを行いました。飼育を例にあげると、まず、生物園での作業の基本となるアゲハ類の単頭飼育を身につけてもらいました。その後、経験の必要な多頭飼育や人工飼料飼育を行いました。さらに発展として人工飼料の作製などを行います(図2)。個々の経験量に合わせて作業に従事してもらうことで、参加者の負担の少ない活動を可能としました。

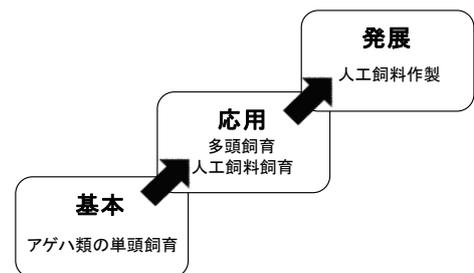


図 2. 作業のレベル分け

## ○月一回の講座

作業の内容を理解することと、ボランティアの知的好奇心を満たすことを目的とし、月一回1時間程度の講座を設けました。講座内容は、飼育作業についてだけではなく「分類学」や「文化史」といったテーマも用意しました(表2)。

表 2. 講座タイトル例

月	タイトル
4	「チョウ飼育ボランティアの説明および生物園におけるチョウ飼育の年間計画とその目的」
5	「チョウの生物学上の分類位置」
6	「チョウの生き残り戦略と死因、飼育下での対策」
7	「身近で見られるチョウとその生息場所」
8	「つくば農業産業環境の井上氏によるチョウの最新研究」

## ○最長 3 年間の活動

なるべく新しいボランティアを取り入れ活動の活性化をはかるため、最長 3 年という活動期間を設けました。

## ○説明会の実施と同意書の提出

以上の仕組みのほか、生物園側の要望である命を扱う作業に責任を持って取り組むこと、施設の目的やルールについて理解してもらうため、活動開始前に説明会を開きました。内容に納得した希望者から同意書を提出してもらうことで、ボランティア活動の開始としました。

## 活動の結果および考察

以上のような仕組みを作り運営を行った21年度ボランティア活動の結果と、効果的であった仕組みについて考察しました。

### ○参加者状況

21年度は、年齢は20代～70代、男性3名女性4名の計 7 名のボランティアと活動を行いました(図3)。職業は、主婦、会社員、定年退職者でした。このことはチョウ飼育ボランティアが、男女問わず幅広い年齢層に需要があること考えられました。

また、コマ単位で参加できる仕組みが、様々な人に受け入れられ、有効に機能したと考えられます。

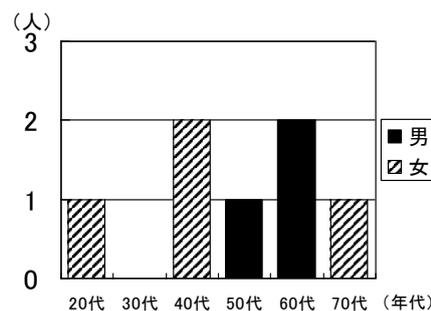


図 3. H21 年度参加者の年代と性別

### ○生物園が得た成果

ボランティア活動の効果を判断する一つの基準として、従事時間を計算しました。

ボランティアの活動従事時間、生物園が運営にかけた時間を比較すると図4のようになりました。

両者を差し引くと、133.4日－19.6日＝113.8日となりました。この日数は、生物園における正規スタッフの年間勤務日数を 230 日とすると、約 0.5 人分に相当します。この労働力が加わったことにより、生物園は以下の二つの効果を得ることができました。

- ・飼育量の安定と食草管理作業の充実。
- ・正規スタッフによる、展示物の作成、写真や飼育データ蓄積の充実。

また、月間放蝶数において減少が見られなかったことから、ボランティアが行った作業に職員比べて質的な低下はなかったと考えられました。

ボランティア作業内容	運操作業内容
飼育準備 (食草採取、吸蜜皿設置) 飼育作業 食草管理作業	説明会・講座(準備・実施) 報告書作成 作業準備 (書類作成・用具準備など)
従事時間 <b>計1000.5時間</b>	運営にかけた時間 <b>計137時間</b>

一日7.5時間勤務で換算すると  
**計133.4日**                      **計19.6日**

図 4. 活動時間の集計

以上の効果を得ることができたのは、参加対象者に年齢制限をもうけたこと、作業をレベル分けしたことが有効に機能したためと考えられます。

## ○ボランティアが得た成果

### ・アンケート結果からみた満足度

ボランティアの満足度を調べるため、21年度の参加者に行ったアンケートをまとめると、図5のような結果が得られました。参加のしやすさ、作業の内容、講座への興味とどれも良好な回答が得られ、活動を通してチョウや飼育作業への理解、興味が深まるなど、満足度の高さが示されました。また、感想の記入欄では「飼育作業の中で学びながら幼虫に触れるのが面白かった」、「人工飼料飼育や越冬飼育について興味がわいた」、「身近にいないチョウの生態、形態が見られたのが良かった」という声を書かれました。

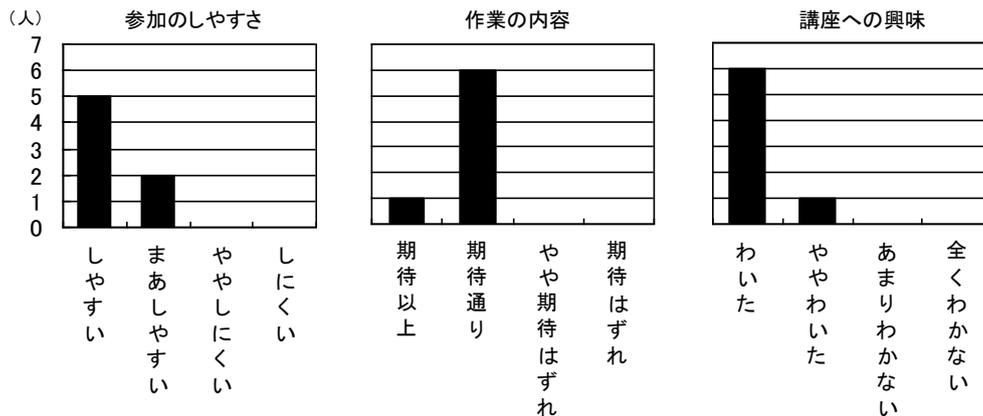


図5. アンケート結果

これらのことは、今回作り上げた仕組みが全般的に、参加者の要求を満たし、有効に機能したからこそ得られた結果であると考えられます。また、アンケート結果以外に、21年度の参加者全員が、22年度への継続を希望したことから満足度は高いと考えられます。

### ・新しいコミュニケーションの場の創出

活動を続けていく中で、ボランティアが作業で得た採卵や飼育の知識を自宅で実践するような動きが見られるようになりました。さらに、ボランティア同士が自宅で飼育している幼虫と食草の交換を行うなど、新しい交流が見られるようになりました。

これらのことは、生物園にとって計画段階では予想していなかった展開でした。ボランティア活動が飼育作業のみにとどまらず、コミュニケーションの場としての新たな役割が生まれたことにつながったと考えられます。

## まとめ

このようなボランティア運営を充実させることは、昆虫飼育施設としての生物園が、地域からの要望に応える一つの形であると考えています。

現在、生物園のチョウ飼育ボランティアは、アンケートや参加者の反応から順調に運営できていると感じています。その要因として、ボランティア活動を開始する前に、生物園と参加者のそれぞれの要望と不安を考え、それを解消するための仕組み作りを行い、それらが効果的に機能したためであると考えられます。

今後の課題として、ボランティア個々のより高度な作業に携わりたいという要望に応えることや、期間を終えたボランティアの新たな活動場所の創出、などを検討する必要があると考えています。